

【海外情報】

1. 「2009 韓国現地研修ツアー」 報告

2009 韓国現地研修ツアーを実施しました!

当協会主催により、11月10日から15日の5日間、韓国現地研修ツアーを実施しました。参加者は、会員企業をはじめ各方面からの反響が大きく、当初予定の30名を超える35名で実施致しました。

研修・視察先としては、国・道・市等の研究機関、施設園芸メーカー、大規模公社、ハード・ソフト面で創意工夫されている先進的な施設園芸農家（トマト、イチゴ、パプリカ、菊、鉢物栽培）、さらに国立園芸特作科学院でのセミナーの実施など韓国施設園芸事情をこの5日間の研修でくまなく情報収集でき、参加者全員が満足いく研修ではなかったかと思えます。

現在、参加された方にアンケートをお願いしておりますので、ご回答頂いた結果は、当協会のホームページへ掲載予定ですので、近日ご覧頂ければ幸いです。

以下に、研修・視察先毎の概要を記します。



1泊目 水原泊

2泊目 金鳥山



3泊目 晋州泊

4泊目 釜山泊



1. 国・道・市等の研究機関

1) 農村振興庁国立園芸特作科学院（*セミナーの実施）

水原市にある農村振興庁国立園芸特作科学院でのセミナーでは、高官達園芸作物部長から「韓国における施設園芸の現況及び研究成果」の発表が有り、国立園芸特作科学院の主な施設園芸研究目標は、韓国独自の園芸作物新品種の育成、省エネルギー技術の開発、施設園芸構造の安全性と施設資材の改善、効率的生産システム・環境管理技術の開発などとの事。イチゴのロイヤリティ問題に対処するため、新品種育成として「華香」の開発を手掛け、現在、韓国内シェア60%を占めているとの事。

引き続き、ソウル市立大学の李 龍範教授による「韓国における養液栽培の現況」の発表の予定でしたが、同教授が急に北朝鮮への出張が入り、代わりに今回のコーディネーターをお願いした慶北大学の李基明教授が説明して頂いた。2000年代に施設園芸作物の生産性、品質向上、安全性等の増大・追求を図るため水耕栽培の面積拡大が進み、2008年には1,107haに達しているとの事。

その後、国立園芸特作科学院場内の各種栽培施設の現場視察等を行った。



2) 慶尚南道農業技術院 技術支援局 農業技術教育センター（ATEC）

晋州市にある慶尚南道農業技術院 技術支援局 農業技術教育センター（通称:ATEC）

は、2009年2月オープンしたばかりである。場内の施設はオランダから輸入された軒高5.5mのダッチライトの実習用のガラス温室8,150㎡が建設されており、実験に使用するガラス温室1,850㎡も建設されている。この施設では、パプリカ、トマト、イチゴ等の養液栽培システムが行われており、ここで、研修生は、短期研修として、基礎理論、課題研修、近隣農家での実地研修を学ぶシステムとなっている。2009年の実績としては、4000名に達すると言う。ここでの目標は、パプリカ、トマト栽培においてオランダの収量の80%を目指しているとの事。(現状50%~60%との事) 今後の先進的な農業を担う人材育成のためには、このような教育の場が重要であることを強調された。



3) 農村振興庁国立園芸特作科学院 施設園芸試験場

釜山市にある農村振興庁国立園芸特作科学院 施設園芸試験場での主な研究課題は、施設環境調節、エネルギー低減化と代替エネルギー利用、養液栽培システム、自動装置化、イチゴ育種等である。特に暖房節減の研究が取り組まれており、化石燃料に依存しないヤシの実の廃棄物や木材を燃料とする実験、フィルム2層の間に昼間地中熱交換で蓄えた空気を夜間循環させたシステム、内部保温カーテン資材がカシミロン+グラスウール+カシミロンの布団を思わせる3層構造(厚さ5cm程度)を巻き取る方式のカーテン装置等の暖房方式の抜本的な改善方法が検討・実用化されている。

2. 温室総合メーカー(株式会社グリーンプラス)

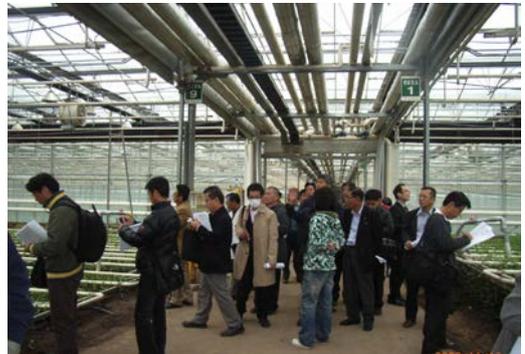
忠清南道礼山郡にある韓国最大の温室総合メーカーは、アルミ・鉄骨・温室の各事業部からなる年間売上げ300億ウォン、その内温室海外輸出50億ウォンを手掛け、1996年~2008年までに日本への温室資材の輸出は132万㎡の実績がある。現在韓国には70社程度の温室メーカーがあるが、ガラス温室まで手掛けるメーカーは20社程度との事。この企業は、今後中東やロシアへの展開も図っていくとの事。

3. 大規模公社

1) 亀尾園芸輸出公社

慶尚北道の亀尾市にある亀尾園芸輸出公社は、1997年に亀尾市が出資して作った日本への輸出専用スプレィグク生産会社である。生産用温室として、オランダ製の軒高4.8mダッチライト型温室7.0畝、親株専用温室として1.2畝で構成されている。

年間1,200万本の周年栽培されたスプレィグクは、ほぼ全量が東京・大阪へ出荷されている。現在年間1,000万本出荷で55億ウォンの売上げとの事。



2) 農業会社法人有限会社亀尾園芸農団

亀尾園芸輸出公社のスプレイギク温室に隣接した、パプリカ栽培の温室は、当初 2000 年に切り花(バラ、菊)栽培を開始したが、その後東南アジア等の切り花価格の競争、価格低迷により、2006 年～2008 年にかけて 83,160m²パプリカ栽培へシフトした。

このハウスは、エフクリーン展張のワイドスパンハウスで、軒高がダッチライト型に比べ低いため、床面を約 60cm 程掘り下げて高さを確保した形状となっていた。

室内気温は 21℃設定、夜温は 19℃で設定されており、平均収量は 14 kg/m²で 300 円/kgで販売業者へ卸している。240 円/kgが採算ベースとの事。

4. 施設園芸農家

1) 鉢花栽培農家 (高陽市)・・・その 1

京畿道の高陽市は、特に鉢花栽培が盛んで、この地区では 3 年に 1 度花の博覧会が開催されていることでも有名である。この地区にある花の団地は 45 名の農家、54 棟の温室合計 175,000m²が設置されており、ハウス新設当時にかかった費用 40 億円(温室本体)は、国・道・市からの 100%補助であり、内部の付帯設備費用は全額個人負担との事。このハウスは面積 4,300m²×2 棟の間口 8m の連棟タイプの大型パイプハウスで日本製の P0 フィルムが展張されていた。

このハウスでは、ポインセチア・ベゴニア等が移動ベンチ式の底面灌水栽培にて、年間生産 50 万鉢、生産額 4.5 億ウォンとの事。

2) 鉢花栽培農家 (高陽市)・・・その 2

引き続き同じ団地内にある、ハウスを視察、このハウスは、面積 4,300m² 間口 8m の連棟タイプの大型パイプハウスで外張は日本製の P0 フィルム、内張は 4 層(内 3 層は自動カーテン方式)の構造であった。これらのハウスは耐風速 35m/s 設計による構造との事。

このハウスでは、バラ・ユリ・キク等が CO₂ 施用、補光ランプを設置した栽培にて、年間生産バラ 15 万鉢、キク及びユリが各々 10 万鉢、生産額 4.0 億ウォンとの事。



3) 杜山農場 (山清郡)

慶尚南道山清郡にある杜山農場は高設栽培によるイチゴ栽培(品種:章姫)を行っている。ハウスは間口 6.8m×奥行 100m=680m²の単棟ハウスで育苗棟:9 棟、栽培棟:12 棟、ウォーターカーテン設備に加え、4 年前より温風加温機導入を行い、現在 6～7 t/10a の高収量を挙げ、年間売上げは、苗が 1.5 億ウォン、イチゴ販売が 2.4 億ウォンとの事。

なお、この農家は、イチゴ栽培歴 28 年、韓国では最初に高設栽培導入、現在国立韓国農業大学現場実習場の現場教授を行っているとの事。

4) Well-being green イチゴ農場 (山清郡)

慶尚南道山清郡にある Well-being green イチゴ農場は高設栽培によるイチゴ栽培(品種:章姫)を行っている。ハウスは間口 16.0m×3 連棟×奥行 72m=3,456m²の栽培ハウスが 2 棟、棟高:5.8m、間口も 16m と広い大空間を持ったパイプハウスである。内部空気量が欲しくてこのような設計にしたとの事。(本人がオランダで研修したことが基礎となっている)

その他に、育苗棟：500 m²×9棟併設、ここでの付帯設備は、自動の保温カーテン2層で1層は保温性が高いと思われる布団式のものも側面にも採用されていた。なお温風暖房機に加え攪拌扇も設置されていた。ここでの年間売上げは、苗販売が2.0千万ウォン、イチゴ販売が1.5億ウォンとの事。

5) 姜 宗錫トマト農場 (山清郡)

泗川市にあるトマト農場は養液栽培(培地:ココピット)による栽培(品種:オランダのラプソディー)を行っている。このハウスは、棟高:5.0m、間口7.0m×4連棟×奥行100mの栽培ハウスで外張フィルムは日本のP0フィルムが展張されていた。ここでの付帯設備は、自動の保温カーテン3層で1層はここでも韓国独自の布団式のものも側面にも採用されていた。温風暖房機による夜温設定は15℃との事。ここでの収量は40~45t/10aで8月~7月までの年間27段採りとの事。



以上、視察先毎の概要を簡単に報告させていただきました。